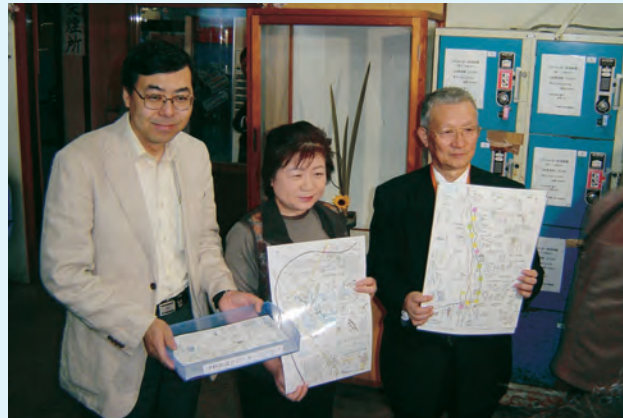


津軽を元気に！地域を元気に！ ～津軽鉄道をめぐる、自発的な地域づくり～

青森県 五所川原市



アコーディオンとギターの伴奏による、懐メロバージョンの「うたごえ列車」。和やかな雰囲気の中で、手拍子をしたり踊り出す乗客もいた。



すべてが会員の手作りにより完成した、「津鉄沿線散策マップ」。沿線の散策を20年以上楽しむ中で見つけた、観光スポットや地元の人でも知らない情報が満載である。



若者の視点で津軽鉄道や沿線地域の活性化を考える「放課後まちづくりクラブ in 津軽鉄道」。高校生や大学生だからこそ生まれるアイデアが次々に出された。

事例の概要

●五所川原市から中泊町までの約20kmを結ぶ津軽鉄道は、昭和5年の開業以来、地域住民の通勤・通学の足として親しまれ、地域のシンボルとしての地方鉄道である。しかし、近年のモータリゼーションの進展により、鉄道利用者数の減少、経済情勢の変化により深刻な経営難に陥っている。津軽鉄道サポーターズクラブは、「おらどの鉄道」（津軽弁で「私たちの鉄道」の意味）として親しまれてきた津軽鉄道の存続・発展を様々な形で応援する活動を通じて、地域全体を活性化し、地域を元気にしていくことを目的に、平成18年1月に設

立された。会員数は約400名で、市民主導型の地域づくりを展開している。
●活動内容は、津軽鉄道への市民レベルでの支援のほか、津軽鉄道を軸とした地域観光資源の発掘、あるいは地域住民による、セミナーやワークショップの開催、各種イベント事業の実施など多方面にわたっている。また、希望者が津鉄線路のオーナーとなる（1m5,000円～）「レールオーナー制度」という取り組みを行い、平成19年2月から平成20年3月までに7,885千円の支援を集め、先進的な話題作りとなった。

評価のポイント

「おらどの鉄道」（津軽弁で「私たちの鉄道」の意味）として親しまれてきた津軽鉄道は、利用者の激減、老朽化施設の保全整備義務付けといった時代の流れの中で、厳しい経営状況に立たされていた。

津軽鉄道サポーターズクラブは、このような津軽鉄道の窮状を住民に知ってもらうとともに、単に鉄道利用者数を増やすということだけでなく、津軽鉄道を活用しながら地域全体を活性化し、地域を元気にしていくことを目的に平成18年1月に設立され、市民主導型の地域づくり活動を展開している。

津軽鉄道への市民レベルでの支援のほか、津軽鉄道を軸とした地域観光資源の発掘、あるいは地域をあげたおもてなしツアーの試行など多岐にわたって

いる。また、市や観光関連団体が実施する観光振興施策への参加・協力など地域おこしに対する熱意、積極的な姿勢は地域住民が認めるところである。

津軽鉄道サポーターズクラブは、津軽鉄道をシンボル化することによって、それを梯子に各種事業を進めることに成功している。また、五所川原を中心とする津軽地域に、住民主導による地域資源の開発や地域づくりを広げて、しかもそれを楽しんでやっているという点で高く評価でき、好感がもてる。こうした住民の意識の変化と活動が将来この地域の内発的発展に大きく寄与するものと考えられる。本事例は、このような点が評価された。

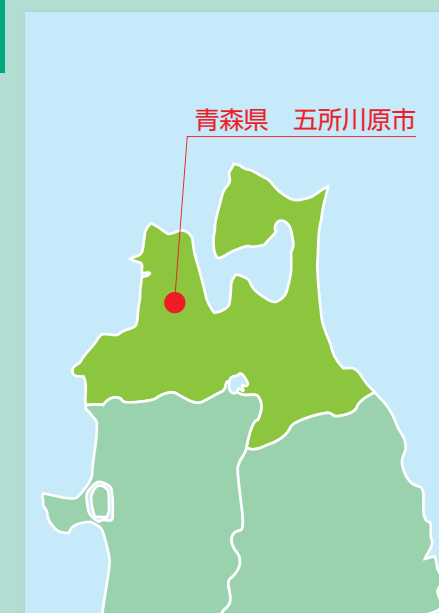


だるまストーブが赤々と燃える、ストーブ列車の中で行われた「雪酔列車ライブ」。列車の中はあたたかい歌声と熱気に包まれ、その後の活動の弾みとなった。



「津軽鉄道観光ビジネスフォーラム」では、講演と参加者による討論会が行われ、地域の観光資源を活かした、地域をあげたおもてなしの観光ビジネスのあり方を考えた。

青森県 五所川原市（ごしよがわらし）



国勢調査人口 (単位：人)				
昭和35年	昭和45年	平成7年	平成12年	平成17年
70,222	67,047	63,383	63,208	62,181

人口増減率 (単位：%)				高齢者・若年者比率 (17年)	
H17/S35	H17/S45	H12/H7	H17/H12	高齢者比率	25.0%
△11.5	△7.3	△0.3	△1.6	若年者比率	14.0%

交通のご案内

自動車 東北自動車道浪岡ICから津軽自動車道経由五所川原ICまで10分
鉄 道 東北新幹線八戸駅から東北本線（八戸駅～青森駅）、奥羽本線（青森駅～川部駅）、五能線（川部駅～五所川原駅）経由150分
飛行機 青森空港からバス40分

団体連絡先

津軽鉄道サポーターズクラブ
〒037-0044
青森県五所川原市元町53番地
NPO法人子どもネットワーク・すてっぷ内
TEL・FAX.0173-34-9022
<http://tutetu.web.infoseek.co.jp/supporer/>